

社会的コミュニケーションの場づくりを目指した オンライン会話会

ーインドネシアの高等学校における非母語話者日本語教師を対象としてー

岡本拓・杉島夏子

1. はじめに

本稿は、インドネシア3州（西スマトラ州、中部ジャワ州、ジョグジャカルタ特別州）の高等学校における非母語話者日本語教師を対象に実施されたウェブコミュニケーションツール zoom を使った会話会の実践報告である。これまで、上記地域のインドネシア人高校日本語教師たちは日本語を話す機会を求めて対面式の会話会は行なったことがあった。しかし、実施のために一か所に集まらなければならないことが、移動や費用などの面で障壁になっていた。本実践では zoom を使用することで、従来の課題を解決するだけでなく、参加者が自己表現できる社会的コミュニケーションの場を作りだすことを目指した。今後の他国・他地域でのウェブツールを利用した教育実践に資するべく、実施方法や参加者アンケート結果を紹介し、実践から得た知見をもとに運営上のポイントをまとめる。

2. 活動の背景

インドネシアの高校で日本語を教えている非母語話者教師たちは長年の日本語学習者であり、教師となった今も日本語能力の維持、向上のために努力を続けている者が多い。しかし、インドネシアでは会話相手になる日本人が周りにいる環境は稀であり、そのような教師たちからは常々「日本語の会話力を維持したい、伸ばしたい」「日本語でおしゃべりする場がほしい」という声が上がっていた。

以前、一部の地域では「日本語おしゃべり会」なるものが開催されていたが、実際のところ、現地の教師にとって一か所に集まって会を開くのはハードルが高いようだ。教師の多くは仕事、家事や育児に追われ、まとまった時間がとりにくいことに加え、開催に至っても会場までの移動時間や費用は自身で捻出しなければならない。また、会場の手配においても参加教師のうちの誰かの高校の教室を借りたりすることになるが、それには校長の許可が必要になるなど、運営上の手続きが多い現状がある。日本語会話会を開催するためには相当な労力が必要であり、開催・参加の動機が保てなくなるのは想像に難くない。

そのような状況や経緯をふまえて、上記地域に派遣されている日本語専門家2名（報告者）

がオンラインで会話会を行なう方法を提案し、各地域で実施することになった。

3. 本活動がめざすもの

本活動は、日本語の会話力の維持・向上をめざすインドネシア人高校日本語教師を対象に日本語を話す機会を提供するものであると同時に、西口 (2018a, b) の言う、参加する者の自己表現を実現する「社会的なコミュニケーション」のための場づくりをめざすものである。西口 (2018b) が述べているように、これまでの日本語教育の議論では「文型・文法の学習や実用的なコミュニケーション」ばかりが取り沙汰されてきた。日本語教育分野の主流が、文型・文法偏重から「実際にコミュニケーションができるようになる」ことに移行し始めて久しいが、ことインドネシアにおいては、コミュニケーション中心の活動が実践において効果的に組み込まれている現場は依然として少なく、まだまだ発展段階であると言える。その一因として教師自身がそのような教育を受けてきていないという背景がある。また、インドネシアでは2013年に全国中等教育カリキュラムが刷新され⁽¹⁾、コアコンピテンスや21世紀型スキルといった能力や態度を身につけ、現代社会に通用する人材の育成に向けた教育を目指している (国際交流基金日本語国際センター 2015)。教育現場でも教師たち自身がまず新しい教育概念を理解し、授業を通して実践しなければならない状況にある。

他方、そうした教師たちも現場を離れば、一日本語学習者・使用者である。JFL (Japanese as Foreign Language: 外国語としての日本語教育) の環境にいる彼らにとって日本語で「道を尋ねる」「買い物をする」「ものを頼む」などの実用的な目的のためだけではなく、「最近あったことや身近なことを友達とおしゃべりする」のような「自己表現活動」を目的に掲げた社会的コミュニケーションを重視した場があってもよいのではないかと思いついた。西口 (2018b) は、このような社会的なコミュニケーションあるいは表現活動の「発見」が日本語教育の構想の重要な転換点となると述べ、「自分のことや自分の身の回りのことや人をテーマに掲げてあれこれ話す」活動を企画している。遠隔教育においても、このような学習者の自己表現を促す「個人化」が関係性構築を促進するという報告がある (斎藤・早川 2012)。本活動においては、上記の考えにもとづき、インドネシアの日本語教師が日本語での社会的コミュニケーション活動を通して関係を構築しながら共に学んでいく機会を提供することを目的に設定した。

4. 実施方法

4.1 使用ツール

会話会には、ビデオコミュニケーションアプリ zoom を利用した。このアプリは、ダウンロードすれば個人のデバイスを使用して無料でビデオ通話ができるツールである。詳細はウェブサイトを参照されたい⁽²⁾。本活動にあたっては、国際交流基金ジャカルタ日本文化センターが

契約している有料アカウントを使用した。有料アカウントと無料アカウントの違いは、連続通話時間の制限の有無である。無料アカウントには一定の制限があり、参加者が3名以上の場合、40分の通話制限がある。しかし、再度ログインすれば引き続き同じミーティングルームで通話が可能となるため、無料アカウントの利用でも会話会の開催は十分可能である。

4.2 会話会の流れと進め方

会話会の所要時間は約30分間に設定した。報告者がホストとなり、表1で示す流れに沿ってファシリテーターを務めた。具体的には、最初の5～10分でテーマを改めて紹介してから、まずホスト自身がテーマに関するナラティブを行ない、発話モデルを示した。次に、ブレイクアウトルーム機能^③を使用し、小グループ（参加人数によるが、4人までが適当）で10～15分ほど会話をしてもらった。この間、ホストはグループには属さず、グループ間を行き来しながら参加者の様子を観察した。会話が円滑に進んでいないグループがあれば発話を促したり、ヒントを出したりすることもあったが、ホストはあくまでファシリテーターとしての役割に徹し、なるべく参加者同士の交流を優先した。グループトークの時間が終わったら、ホストはブレイクアウトルームを解除して参加者をメインルームに戻す。そして、グループ内で一番盛り上がった話などをグループの代表者に話してもらいながら全体共有を行なった。最後に、ホストがまとめをして閉会する。閉会の前に、次の開催日やテーマをお知らせしておくこと継続的な参加につながりやすいだろう。

表1 会話会の流れ

所要時間	内容
開始15分前	ミーティングルームオープン
5～10分	開会、テーマの紹介、ホストのナラティブ
10～15分	ブレイクアウトルームに分かれて、小グループでトーク
5分	メインルームにもどって、全員でトークの共有、まとめ
30分程度	

所要時間を30分程度に設定したのは、①参加者の多くが自身の携帯電話通信データを消費して参加しているため彼らの負担をできるだけ減らすこと、②長時間におよぶ画面越しのコミュニケーションは、不慣れな参加者にとっては疲労感、倦怠感につながるおそれがあること、③「時間が足りない、もう少し話したい」と感じる“腹八分”で終わることで、次回への参加を促す効果が期待できること、という3点を考慮した結果である。

4.3 当日までの事前準備

事前準備としては、開催の1週間くらい前に zoom 内でスケジュールを設定しておいた。次

に、開催日時とテーマ、zoomのミーティングIDなどの開催内容をお知らせした。参加者は、教師会のFacebookグループページなどのSNSに投稿したり、チャットアプリのグループ内で告知を行ったりして募った。

5. 開催実績

2018年7月から、西スマトラ州、中部ジャワ州およびジョグジャカルタ特別州の各地域でそれぞれ月に1～2回程度、実施した。同年12月現在、16回の開催を数え、のべ113名が参加した。なお、中部ジャワ州とジョグジャカルタ州の両地域においては、合同教師会があったり、教師同士の知り合いが多いため、合同で開催することにした。開催回数と参加者の内訳は、中部ジャワおよびジョグジャカルタが7回開催でインドネシア人教師37名、日本人ボランティア10名、西スマトラが9回開催でインドネシア人教師76名、日本人ボランティア31名である。日本人ボランティアは、報告者の知人に協力を依頼したり、現地の先生がインドネシアに派遣されている日本語パートナーズ⁽⁴⁾を誘ったりして募った。各回の参加者数には制限を設けず、当日自由に参加することができるようにしたため、少ない回で7名、多い回で20名の参加があった。各地域の開催日とテーマは表2に示すとおりである。テーマの選定においては、3.で述べたように、本活動が参加者にとっての社会的コミュニケーションの場となることを重視し、参加者が自分自身や身の回りのことについて話せる話題が中心になるよう心掛けた。教師の日や年末等のイベントが近い場合はそれらにまつわるものをテーマとすることで話が盛り上がった（「私の好きな先生」「2018年私のビッグニュース」「掃除」等）。また、参加者からのリクエストを募り、それを参考にしてテーマを決定することもあった。そういった回はリクエストした参加者の積極性が普段より高いように感じた。

表2 開催日とテーマ（開催地域別）

西スマトラ州		中部ジャワ州・ジョグジャカルタ州	
7/28	ユニークな自己紹介	9/20	子供の頃の夢
8/11	教室で使える日本語	10/ 4	尊敬する人
9/14	生まれ変わったら…	10/17	世界最後の日
10/12	10年後の私	11/ 1	希望
10/19	10年前の私	11/24	日本語質問会（中部ジャワ州）*
11/ 2	私が今欲しいもの	11/25	日本語質問会（ジョグジャカルタ州）*
11/16	日本とインドネシアの迷信	12/13	2018年私のビッグニュース
11/30	私の好きな先生		
12/ 7	掃除（日本とインドネシアの文化比較）		

*日本語質問会（11月24日、25日開催）は、日本語能力試験の日が近かったことから、参加者の要望により、日本語に関することを日本語で質疑応答する活動に変更した。

6. 参加者アンケート調査

インドネシア人教師参加者からオンライン会話会に関する評価や意見を聴取するため、アンケート調査を実施した。アンケートは Google Forms で作成し、質問文は日本語とインドネシア語を併記した。質問項目は、参加者の地域と自己申告による日本語レベルのほか、参加目的とその達成感、参加が日本語学習継続のきっかけになっているか、参加によって日本語を使用する機会が多くなっているか、今後の参加意思、参加する前に準備や勉強をしたか、満足度とその理由についてである。各質問項目と回答結果について、以下で詳しく説明する。

回答期間は2019年2月8日から2月28日までとし、オンライン会話会に参加したことがあるインドネシア人教師に対して報告者が直接協力を依頼し、アンケートの URL リンクを頒布した。集計の結果、3地域から29名の回答を得た。アンケートに回答した参加者の地域と日本語レベルは、図1のとおりである。日本語レベルに関しては、日本語能力試験のレベルに照らし合わせて現在の相当レベルを自己申告で回答してもらった。

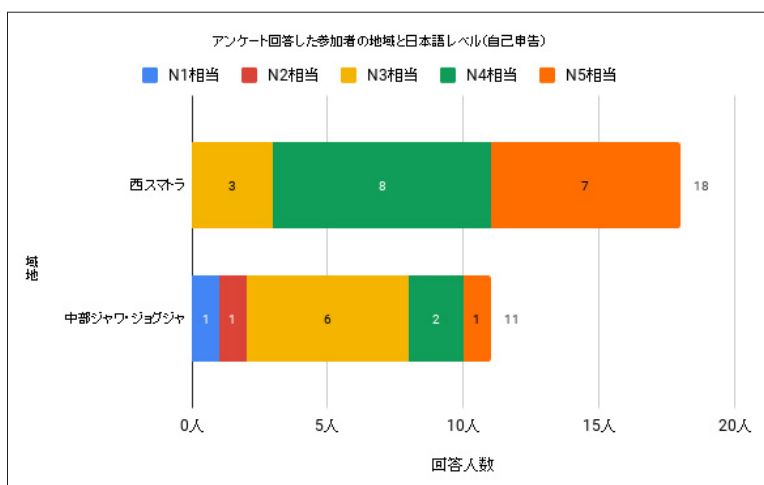


図1 アンケートに回答した参加者の地域と日本語レベル

6.1 参加の目的と達成感に関する質問

参加の目的を問う質問（あなたがオンライン会話会に参加する目的は何ですか）には自由記述で、その目的に対する達成感を問う質問（その目的は、オンライン会話会に参加して達成できていると思いますか）には、5段階のリッカート尺度（1=とてもそう思う、2=そう思う、3=どちらとも言えない、4=あまりそう思わない、5=全然そう思わない）で回答してもらった。

参加の目的として、「日本語の会話能力の向上または維持」に言及した回答が26名、「日本語の勉強・練習のため」という回答が3名であった。参加する目的に対する達成感を問う質問で

は、22名 (76%) が「とてもそう思う (達成できている)」、7名 (24%) が「そう思う」と回答し、回答者全員がオンライン会話会に参加する目的を達成できていると感じていることが分かった。

6.2 日本語学習の継続に関する質問

「オンライン会話会に参加することが日本語学習を継続するきっかけになると思いますか」、「オンライン会話会に参加することで以前より日本語を話す機会や時間が多くなったと思いますか」という質問に6.1同様の5段階のリッカート尺度で回答してもらった。結果は、どちらの質問でも「とてもそう思う」が17名 (59%)、「そう思う」が12名 (41%) で、回答者全員がオンライン会話会に参加することが日本語学習継続のきっかけになると思っており、オンライン会話会に参加することで日本語を話す機会や時間を得られていると実感していることが分かった。

「これからもオンライン会話会に参加したいと思いますか」という質問に関しては、「とてもそう思う」が16名 (55%)、「そう思う」が13名 (45%) で、回答者全員が今後もオンライン会話会に参加して、持続的に日本語を学びたいと考えていることが分かった。

6.3 オンライン会話会に参加するための準備に関する質問

「オンライン会話会に参加する前にしている準備 (勉強や調べ物) があれば教えてください」 (自由記述) と質問したところ、29名中21名が何らかの準備をしていると回答した。事前に会話会のテーマに沿った単語や表現などを調べて「予習する」とした回答が16名 (55%)、会話会中にメモを取るための筆記具やノートなどの「道具」が4名 (14%)、分からない単語を参照するための「単語帳」を準備するとした回答が2名 (7%) だった⁶⁾。また、「(準備や予習をすることは) ない」と回答した者が8名 (28%) いた。上記のような参加者が各自で行なった準備や予習は、会話会の参加にあたっての課題ではなく、報告者が想定していなかったことである。図らずも、参加者の自発的な学習機会を生み出していることが分かった。

6.4 オンライン会話会の満足度とその理由

「オンライン会話会の活動に満足していますか」という質問には5段階のリッカート尺度 (1=とても満足している、2=満足している、3=どちらとも言えない、4=あまり満足していない、5=全然満足していない) で回答してもらい、その理由を自由記述で答えてもらった。

集計の結果、「とても満足」12名 (41%)、「満足」13名 (45%) の回答があり、25名 (86%) の回答者がオンライン会話会に満足していることが分かった。理由としては、「単語を習得して即実践できる」「地元ではなかなか会えない日本人と直接話す機会を得られる」「業務以外で

話す機会は貴重」「日本語でアウトプットする機会になる」「参加後、単語や文法が身についている」などの好意的な回答があった。中には「満足」と回答しながら、「時間をもっと長くしてほしい」「開催頻度を増やしてほしい」という、参加に対して積極的な要望も見受けられた。一方、4名（14%）からは「どちらとも言えない」という回答を得た。理由として、「参加者がいつも少ない」（2名／中部ジャワ・ジョグジャ）、「地方はインターネットが弱いので参加が難しい」（1名／西スマトラ）、「時間の都合がつきにくい」（1名／中部ジャワ・ジョグジャ）というものだった。今後の活動にあたっては、参加者増加のために広報活動を効果的に行なったり、より多くの参加者が集まる開催時間を検討したりするなど、改善できる余地があることが分かった。

7. 円滑な運営にあたって配慮した点

以下、インドネシアにおける zoom 会話会実践から得られた注意すべきポイントや改善点について記す。

7.1 “オフライン”で zoom 体験ワークショップ開催

インドネシア人日本語教師にとってオンライン会話会は、日本語で話す心理的ハードルに加え、テクノロジーに不慣れな参加者にとっては技術的なハードルも生じる。そこで、それらのハードルを緩和し参加を促すために、報告者が各地域の教師会に赴き、zoom の紹介と会話会の宣伝を行なった。実際に体験して「自分でもできる」「楽しそう」と思ってもらえる工夫が必要だと考え、体験型ワークショップも併せて実施した。教師たちのデバイスにアプリケーションをインストールしてもらってから始め、zoom の機能や使い方を説明しながら、その場で実際に使って教師仲間と話す体験をしてもらった。教師たちはワークショップでの体験を通してオンライン会話会のイメージが持てたようだった。この会話会はオンラインの活動ではあるが、上記のように報告者が事前に“オフライン”で、つまり直接会える教師会などに出向いて広報したことで、より多くの教師の参加に繋がったと感じている。

7.2 実施後間もない時期の開催や初めての参加者がいる場合の配慮

オンライン会話会を始めて間もない時期には、参加者のテクノロジーに対する心理的ハードルを下げるための配慮が必要であろう。zoom 入室後の画面操作や設定が苦手な参加者がいる場合や初めての人が参加する場合には、4.2の表1に記載したように、開始の数分前にミーティングルームを開けておき、そのような参加者が早く入室できるようにしておくことを強くお勧めする。そうすることで、開始時間になってからそのような参加者のサポート対応に追われることが防げるし、他の参加者を待たせることもなくなるだろう。

7.3 参加者の通信環境やデバイスの事前確認の必要性

参加者の通信環境や会話会に参加するために使用するデバイスやOSの種類（iOSやAndroidなど）を事前に確認し、ある程度把握しておくことにより円滑な運営が可能になる。zoomは、通信速度がある程度遅くても、ほかのツールやサービスより、比較的安定した通話が可能である。しかし、参加者がWi-Fiがない不安定な通信環境にいたり、パーソナルデバイスのデータ通信を消費して参加したりしていると、途中で通信が途切れてログアウトする（ミーティングルームからいなくなる）ことが想定される。さらに、zoomはパソコンでもスマートフォンでも使用できることが特徴のひとつであるが、デバイスやOSの種類によってユーザーインターフェースと呼ばれる画面の表示やボタンの位置などの仕様が異なる。そのため、初心者ユーザーには分かりにくく感じられるかもしれない。ホストは円滑な運営や、いざという時のサポートのために、事前にテストして確認しておくことよいだろう。

7.4 ホスト側のバックアップ用デバイスの準備

ホストであっても会話会の最中に不安定な通信状態やデバイスの不具合の影響を受けることもしばしば起こりうる。万が一の事態に備えて、ホスト側では進行のためのメインデバイスの他に、バックアップ用として別のデバイスを用意しておくことをお勧めしたい。バックアップを用意するメリットは他にもある。それはバックアップ用デバイスがモニター機能も果たすことである。つまり、ホストが参加者側の画面を確認しながら進められるので便利である。バックアップ用デバイスを共同ホストに設定しておけば、メインデバイスのアカウントをメインルームに残したまま、バックアップ用デバイスのアカウントでブレイクアウトルームの様子を見て回ることができる。

7.5 グランドルールの設定

オンラインでの会話は、複数の人がスピーカーをオンにしたままにして話すとハウリングが起きたり、一度に複数の人が話すとお互いの声が聞き取れなかったりするため、オーディオの入力／出力の切り替えや話すターンの取り方を参加者とあらかじめ共有しておく必要がある。また、ブレイクアウトルームに分ける際に、日本語会話力が同程度の参加者が同じグループになるように可能な限り配慮した。しかしながら、それでも会話会に参加する教師によって会話レベルにもばらつきがあるため、ファシリテーターとして円滑な運営を心がける必要がある。会話が得意な人がずっと話して時間が終わってしまったり、失敗を恐れて日本語を話さない人がいたりしないように会話会のはじめにグランドルールの確認を行なうと、そのような状況が改善できるだろう。図2に報告者が実際に参加者に共有したグランドルールを示す。

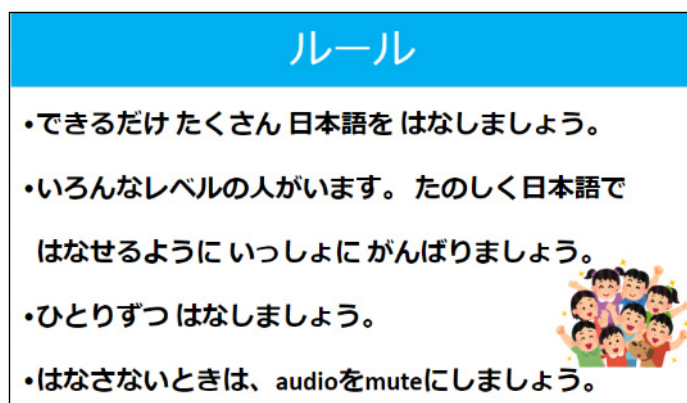


図2 会話会で使用したルールのスライド

8. 今後の課題

今後の会話会の開催に向けて新たに、参加者にプレタスクシートを事前配布することを検討したい。本稿で報告する会話会では、事前にテーマを知らせるだけであったが、今後は、千葉ほか（2018）にあるような、テーマに関する単語を記したプレタスクシートを作成し、事前に参加予定者と共有したい。これにより、日本語能力に自信がない人が参加しやすくなったり、より達成感を感じてもらいやすくなったりすることを期待する。今後も参加者からの意見に耳を傾けながら、よりよい学びの場を作っていく。

また、オンライン会話会の運営に関して、専門家がホストとファシリテーターを務める現在のやり方から、現地の教師たち自身が会話会を計画し、ホストやファシリテーターを務める形へとシフトしていくことが理想であると考え。その中で専門家に求められることは、テクニカルな面での継続的なサポートに加え、ファシリテーターとして全体を見渡して会話会が円滑に運営できるように働きかけられる人材を育てていくことであろう。

9. おわりに

昨今のインドネシアでは、教師だけでなく生徒もほとんどがスマートフォンなどのパーソナルデバイスを所持しており、今後もデバイスやテクノロジーを利用した様々な学びの形態が増えていくと予想される。また、教育課題として21世紀型スキルの育成が組み込まれるようになり、それに合わせて教師たち自身も ICT スキルを高め、教育実践の中に取り入れていくことが求められている。本活動は、そのようなインドネシアの教育情勢における教師支援の方策のひとつとして位置付けられるだろう。また、本報告がインドネシアにおける日本語教育支援の一環として、ウェブツールを利用したオンライン教師研修や勉強会の可能性を開く一助となることを願ってやまない。

〔付記〕

本稿は、2019年度日本語教育学会春季大会で行なわれたポスター発表の予稿集に掲載された内容をもとに、加筆・修正されたものである。

〔注〕

- ^① インドネシアでは、約10年に一度の頻度で教育カリキュラムが見直され、教育現場はその度に対応に追われる。2013年にも2006年から施行されていた全国中等教育カリキュラムが大きく刷新され、その後も部分的に改訂を繰り返しながら全国的な導入が段階的に進んでいる。
- ^② ビデオコミュニケーションアプリ zoom のウェブサイト (英語) <https://zoom.us/>
- ^③ ブレイクアウトルームとは、グループ通話中に参加者を小さいミーティングルームに分け、2名以上のグループで話させることができる zoom の機能である。ブレイクアウトルーム中、ホストは自由にグループ間を行き来でき、様子を巡回することができる。
- ^④ “日本語パートナーズ” 事業とは、国際交流基金の派遣事業のひとつで、「幅広い世代の人材を ASEAN 諸国の主として中等教育機関に派遣し、現地日本語教師と学習者の日本語学習の「パートナー」として、授業のアシスタントや会話の相手役といった活動をするとともに、教室内外での日本語・日本文化紹介活動等を行ない、ASEAN 諸国の日本語教育を支援」している (公式ウェブサイト <https://jfac.jp/partners/> より抜粋)。なお、インドネシア派遣は2014年度より開始し、2018年度までに約600名の日本語パートナーズが派遣されている。
- ^⑤ 自由記述のため「道具」と「単語帳」の両方記述した者が1名いたため、それぞれの項目に含めて集計した。

〔参考文献〕

- 国際交流基金日本語国際センター (2015) 『21世紀の人材育成をめざす東南アジア5か国の中等教育における日本語教育—各国教育文書から見える教育のパラダイムシフト—』、国際交流基金日本語国際センター
- 斎藤里衣子・早川雅子 (2012) 「ことばの学びを支援する遠隔日本語教育とは何か—スウェーデン・ダーラナ大学の事例から—」『日本語教育国際研究大会予稿集』 152
- 千葉朋美・武田素子・廣利正代・笠井陽介 (2018) 「「まるごと (A1) 教師サポート付きコース」の運用と成果」『国際交流基金日本語教育紀要』 14、51-66
- 西口光一 (2018a) 「学習言語事項からの解放と自己表現活動への移行は何を意味するか—自己表現活動中心の基礎日本語教育と Krashen の入力仮説—」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』 22、67-76
- 西口光一 (2018b) 「日本語教育実践の再生：表現活動中心の日本語教育を創造する NEJ と NIJ」
<<http://koichimikaryo.blogspot.com/2018/12/nejinij.html>> (2018年12月11日)